

いわき湯本病院

症 例 概 要 患者:80歳代 女性

病名:胸背部痛、体動困難

入院期間:令和5年2月 ~ 令和5年6月

経過:自宅で夫と二人暮らしで、自立し家事動作や散歩なども行っていた症例。令和4年12月ごろから午前中に家事動作を行うと胸のあたりが重苦しくなる感じがみられていましたが、自宅で様子を見ていました。転倒後から胸背部痛及びめまい、思うように動けなくなり前医へ救急搬送、検査の結果では明らかな原因が不明。しかし体動困難が全く改善しないため長期療養を目的に令和5年2月当院へ転院となりました。当院転院直後は食思不振や疼痛の訴えもありリハビリにも消極的でしたが、根気強く、少しずつリハビリを進めていった結果、約4か月の入院を経て屋内歩行および一部の家事動作が可能となり施設へ退院となった症例。

内 容

もともと自宅で生活しており家事も行い散歩などもしていました。令和4年12月頃より、午前中に家事を行うと午後は胸のあたりが重苦しくて動けなくなり、眩暈もみられるようになりましたが、自宅で様子を見ていました。詳細不明の転倒後より疼痛と眩暈のため体動が困難となり、前医へ救急搬送。検査を行いました。体動困難の明らかな原因は不明であり、高齢であることから長期療養を目的に令和5年2月に当院を紹介され転院となりました。

転院当初は「めまいがするから動けない」、「体が痛いから動きたくない」等の訴えが多く、リハビリに消極的で、食思不振もあり積極的な介入が出来ない状況でした。ご本人の話を傾聴すると初めはあまり話していただけませんでした。1か月ほどすると徐々に「夫に対する不満」や「自分が家事を行っていくことに対する不安」などを話して下さるようになり、「改善すると自宅へ退院しなくてはいけなくなりますが、夫と二人の生活には戻りたくない」と考えていることがわかりました。相談室が介入し、ご本人の思いに合わせて自宅以外にも退院先があることを説明をしていったところ、退院に対する不安が軽減し、前向きな発言がみられるようになってきました。この頃より食思も改善し、眩暈の訴えは残存しましたが笑顔が増えリハビリに前向きに取り組むようになっていきました。

入院2か月後には歩行器での院内歩行が可能となり、3か月後にはT字杖での歩行が可能となりました。眩暈の訴えは残存しましたが、掃除などの家事動作の練習も行い、4か月後には連続500m程度の歩行がフリーハンドで可能となり、階段昇降も手すりを使用して自立となりました。

キーパーソンの息子と退院先の相談を行ったところ、患者さんが入院してから夫の世話をした息子夫婦は夫の態度の問題を把握しており、これ以上の苦勞を母にさせたくないとして施設への退院を同意され、6月にご本人が希望された有料老人ホームへと退院になりました。

4ヶ月と長期間ではありましたが、ご本人の心に寄り添い、心のつかえを取り除くことで前向きにリハビリに取り組み飛躍的にADLが向上した症例です。療養病棟でもしっかりとリハビリに取り組む当院だからこそ成しえた本症例をミラクル賞に推薦いたします。